

Back Number

本論文は

世界経済評論 2021年9/10月号

(2021年9月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読
期間中

デジタル版バックナンバー 読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp
雑誌のオンライン書店



川合 麻由美

Phoenix LLC 社 上級コンサルタント在サウジ

「甘い生活」からのリセットなるか？ ：サウジアラビアの生活習慣病とのバトル

メディアに登場するサウジアラビアの人たちは威風堂々、圧倒する押し出しの持ち主が多い。健康志向にはまった日本人の目には、余計なお世話だと知りつつも「あれで糖尿病は大丈夫か」とつい思ってしまう。そうなのだ。コロナ以前からサウジでは糖尿病抑制が国を挙げての大命題になっている。

サウジアラビアでは生活習慣病でもある糖尿病の有病率が18%を超え（有病者数約430万人程度）、中東諸国の中でもエジプトに次いで有病率第2位となっている。1型の新規症例が世界で7番目に高い。しかも、急速に罹患者が増えている。有病率は1975年から3倍に増加、なかでも16歳以下の年齢層では10倍に増加している。サウジアラビア政府は、2030年までに糖尿病の有病率10%削減計画を立てている。個人のライフスタイルを改善することを目的とした「クオリティ・オブ・ライフ・プログラム2020」は、より健康な国作り、有病率の引き下げ対策を盛り込み、最も住みやすい上位5か国の糖尿病有病率平均（3~8%）レベル実現を目指している。サウジアラビアの人口は若年層の割合が非常に高い（35歳以下が65%を超える）が、今後10年で40~60歳の層が大幅に増えることから、こうした生活習慣病の予防は今後の医療を考えるうえでも重要な点となる。

サウジには国民がIDを提示すれば無料で医療が受けられる制度がある。他方、会社の健康保険でカバーされる人口が増えるにつれ、リードタイムが短く効率的な私立病院への需要が高まっている。政府の施策はヘルスケアセクターを大幅に民営化へと転じ、2030年までに約660億ドルを医療インフラに投入する計画である。

糖尿病有病率が高い原因は想像の通りである。高カロリーの食習慣、年間を通じた高温地域に起因する運動不足といったライフスタイルがあげられる。

筆者の身辺を見ても幼少時にコーラなど炭酸飲料で育った人が非常に多い。これが習慣化して大人になってもなかなかやめられなくなる。また、中東一般に言えることだが、お茶を飲む際に入れる砂糖の量が非常に多い。コーヒーに砂糖は入れないが、お茶にはたっぷりと砂糖を入れる光景が多く見られる。

子供、思春期の糖尿病有病率の高さは、炭酸飲料、エナジードリンクの習慣的摂取とゲーム、Netflixなどの座ったままのオンライン娯楽による運動量の低下によるもので、問題の解決は容易ではない。Faisal Specialist Hospital & Research Centreによる16歳以下の食生活、行動様式に関する調査では、炭酸飲料などの消費は女子よりも男子が多い。サウジでは、デリバリーが非常に充実しているため、若年男性層は頻繁にファーストフードデリバリーを利用しており、注文には必ず炭酸飲料が登場する。炭酸飲料が好きだという理由もあろうが、他に飲料のチョイスがあまりないということも一因であるようだ。

政府は糖尿病抑制を目指して、2019年12月から糖税を導入した。炭酸飲料、砂糖入り飲料（SSBs）に対して小売価格の50%が課税されるという高率である。課税対象は、水と砂糖、甘味料、濃縮液体、粉末、または飲料に変換された抽出物からなる甘味料入りの飲料に適用さ

れる。

課税の狙いは成功しただろうか。KPMGの当時の予測では糖税の影響は限定的とみており、また Imam Abdulrahman Bin Faisal 大学がサウジ東部で行った子供の炭酸飲料の消費への影響に関する調査でも、この糖税が、消費の減少や大きな行動様式の変化にはつなげていないという結果になっている。理由としては、元々の値段が課税後価格を見て躊躇するほど高価なものではないということから、国民のライフスタイルを変えるには糖税の増加のみでは難しく、ヘルスケア意識の向上や他の対策を併せて実施することが必要のようである。

当然、国民の健康志向は目立ち始めている。国民の健康に対する意識の高まりに見合って、砂糖不使用、または減糖商品は、糖税の課税対象から外れている。市場では減糖をもとに徐々にヘルシーを謳い文句に、高めの値段を設定しても売れる構造にもなっているようだ。

パンデミック禍のロックダウン中、サウジ国内では様々な分野で e-government が躍動した。行政のデジタル化に加え、オンライン医療や診療も進んだ。リヤドのキングサルマン病院糖尿病ケアセンターをはじめ、糖尿病関連医療機関は、コロナに罹患すれば重篤になるリスクが非常に高い糖尿病患者のフォローアップを遠隔医療に頼らざるを得ず、治療薬を急遽病院スタッフが配達した。この遠隔医療には通常の個人の電話のみならず ANAT アプリ（専門医療従事

者間のコミュニケーションチャネル。患者が受けるサービスレベル向上を目的とした医療従事者のためのプラットフォーム）が使用され、遠隔医療のフォローアップがなされた。キングサルマン病院では1万3,000人の糖尿病患者に対して遠隔医療の有効性・満足度調査を行い、対面ではなくとも患者の満足度と有効性がかなり高い結果が出た。今後の糖尿病治療における遠隔医療の可能性を示唆している。

サウジ人の多くがかなりの海外経験を持ち、若い層は海外の食べ物、ダイエット法などにも非常に敏感であることから、ビーガン（完全菜食主義）人口も増えている。また脂質を多く炭水化物を少なく摂取するケトダイエット等を心掛ける傾向も見られる。糖質摂取に敏感な若者の中には、砂糖の代替として、人工甘味料ではなく、モンクフルーツ（日本では羅漢果）を代替摂取する例も見られる。日本では糖質を控えたお菓子、スイーツなどがコンビニエンスストアでも気軽に買えるようになった。アラブスイーツは別としても、ケーキなどのスイーツは、サウジアラビアではエジプト程の強烈な甘さはない。過日、砂糖がかなり控えめなスイーツをサウジ人に食べてもらったところ、砂糖が少ないのにこんなにおいしいのかと驚いていた。あまり味を変えなくても、日本の糖質制限食品は、サウジのような糖尿病有病者や予備軍が多い国では大きな可能性があると思われる。

（かわあい まゆみ）